

シンポジウムの目的と概要

熊野谷 葉子

これまでに採録されてきた口承文芸のテキストは、現在、日本および世界各地でどのように保管され、公開されているのか。またそこにある問題点と可能性、今後の課題は何か。第41回口承文芸学会大会シンポジウムは、口承文芸に携わる者であれば一度は関心を抱いたことがあるであろうこの問題に正面から取り組み、広い視野をもって検討する狙いで企画された。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの薫風吹き抜ける明るい大教室で、スクリーンには次々に各種データベースやウェブサイトが映し出され、新旧の語りの音声や映像が流れ、3時間にわたって様々な情報交換が行われた。

口承文芸学会の40年余りの活動の中で、アーカイブというテーマが大きく取り上げられたことは、おそらくない。しかし会員の中にはフィールドワークによって昔話や民謡、伝説などを記録してきた人も多く、蓄積された大量の録音・録画資料、話を書き留めた文字資料等をどのように扱っているのか、また扱うべきなのかを互いに議論することは、これまでもあってしかるべきだっただろう。特に採録が個人で行われた場合、録音やノートなどの一次資料は採録者の自宅に保管され、一部が出版という形で外へ出るほかは、採録者の活動停止と共に消滅することが予想される。それがどのように保管され公開されることが望ましいかはプライバシーや著作権の保護からも学術的観点からも議論されるべきで、口承文芸学会こそはそうした議論にふさわしい場所ではないだろうか。

また、音声であれ映像であれ複製やデジタル化、インターネット上での管理がかくも容易で普通のこととなった現在、口承文芸のアーカイブも古文書館の棚にではなくデジタル空間に置かれる可能性が考えられる。では今日、口承文芸研究またはそれに隣接する分野において、デジタルアーカイブをめぐる状況はどのように進行しているのだろうか。

かくして第41回口承文芸学会大会シンポジウムのテーマは「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」と決まった。登壇者を集め司会を務めたのは、アイヌ語およびアイヌ口承文芸研究の分野で豊富な経験とデータを持つ千葉大学の中川裕氏である。中川氏は専門分野もデジタルアーカイブとの関わり方も異なる4名に声をかけ、各人から特徴ある報告を引き出した。それぞれの詳しい内容は各自の論文に譲るが、ここではパネリストとその報告の簡単な内容を紹介しておきたい。

最初の登壇者は、このシンポジウムを発案し、現在自分の行ったロシア・フォークロアの現地調査の資料のデータベース化に取り組んでいる熊野谷葉子（慶應義塾大学）である。熊野谷はまず、世界のフォークロア研究における重要なテーマの一つがデジタルアーカイブの構築

と公開であることを述べた。2016年9月に報告者が参加した国際学会「デジタルフォークロア学へ向けて」(於ラトヴィア国立図書館)では、欧米各国が自国に保管されているフォークロア資料のデジタルアーカイブ化を国の事業として進めている様子が明らかになった。ロシアでも、科学アカデミーが膨大な叙事詩の文字資料と録音とを合わせて公開するサイトを運営し、モスクワ音楽院は他分野の専門家の協力を得て総合的な民族音楽とその環境の記述を行うサイトを立ち上げている。ウェブ公開ではなくディスクの形で様々な資料をリンクさせて出版した国立シクティフカル大学の例や、自分の現地調査結果をデータベース化して一部を公開している個人の運営によるサイトも紹介された。また報告者は、自分自身が構築中の総合的デジタルアーカイブおよび一般向けのマルチメディア出版物の計画についても報告した。

次に登壇した安田益徳氏は、白老のアイヌ民族博物館でアイヌ語アーカイブの作成と公開に取り組んでおり、そのアーカイブの特徴や製作の方法を具体的に報告した。同館では所蔵している音声資料670時間分、映像資料500時間分のデジタル化が進み、すでにその一部はデータベース化されて、インターネット上で誰でも利用できるようになっている。同館のホームページから「アイヌ語アーカイブ—博物館の視聴覚資料を聴く・見る・読む・調べる」に飛ぶと、単語や地域、人名、キーワードなどを入れる検索窓がある。ここから検索すると該当する箇所のアイヌ語文と日本語訳が表示され、さらにアイヌ語音声を聞いたり動画を見たりすることもできる。このアーカイブ作成プロジェクトが3年かけて行われたことで、若手アイヌの文化伝承が進み、録音された語りを実演する新しい語り部も現れたという。デジタルアーカイブが口承文芸の再生のきっかけとなっていることが分かる報告であった。

国立歴史民俗博物館で「民謡データベース」の作成に携わる後藤真氏は、人文情報学の動静にも明るく、報告もこの両側面から行われた。同館の民謡データベースとは、主に1980年代に行われた文化庁の「民謡緊急調査」で集まった民謡の録音とその他の情報をデジタル化し、利用可能にしたものである。これらの民謡の音源はCD化されており、著作権上の問題もクリアしたものだが、利用が千葉県佐倉市の歴史民俗博物館の館内に限られているため、利用者が少ないという問題がある。後藤氏が紹介した「人文情報学 Digital Humanities」は人文科学分野で蓄積された各種資料のデジタル化とその問題を扱う分野である。後藤氏によれば、音声、動画、文書資料のデジタル化には、フォーマットの適切性や権利問題、データの脆弱性などの問題はあるものの、その「発見可能性」はアナログデータの比ではない。日本でも近年認知度が上がっているこの学は、まさにデジタルアーカイブに正面から取り組む分野なのである。

最後に登壇したのは、日本と韓国の膨大な昔話資料を検索できる「東アジア民話データベース」を作成した専修大学の樋口淳氏である。樋口氏は、世界のデジタルアーカイブには、オリジナル技術で収蔵品を公開する「ミュージアム型」と既存の技術を利用したデータベースを公開する「汎用型」があると指摘した。前者は各アーカイブの資料を分かりや

すく展示するには適しているが、他のデータベースとあわせた資料検索ができないという難点がある。樋口氏が作成した「東アジア民話データベース」はファイルメーカーを使用した汎用型で、多言語対応のため、将来的には世界中の口承文芸資料を合わせて検索することも可能である。現在、このデータベースには6万3千話以上の民話が格納されており、利用者は話のタイトルや語り手、採録地など様々な検索を通して多様な民話を聞くことができる。樋口氏は更にこのデータベースを拡大した「世界口承文芸アーカイブ」を日本発で作るという試みについても報告した。

こうした報告を受けて会場からは、紹介されたデータベースの技術を自分たちも使えるか、といった質問や、語り手と採録者の権利に関する質問・意見等が出て、活発な議論が交わされた。学会としては、まず既存の口承文芸デジタルアーカイブについての情報交換が必要だという認識で一致した。本シンポジウムは、学会員が世界の口承文芸デジタルアーカイブの状況にふれ、個人や所属先が所蔵する資料の整理と活用について考えることに扉を開いたと言えるだろう。(熊野谷葉子)

第41回大会シンポジウム「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」

個人調査資料アーカイブ構築の方法と課題

—欧米・ロシアの口承文芸デジタルアーカイブを参考に—

熊野谷 葉子

口承文芸資料の適切な保管と公開とは

2016年9月にラトヴィア国立図書館で行われた国際学会「デジタルフォークロア学に向けて (Towards Digital Folkloristics)」では、欧米各国の図書館員、博物館員、フォークロア研究者が3日間にわたってデジタルアーカイブ作成に関する報告、インターネット上でのフォークロアの生成・蒐集・公開に関する報告を行った。学会の詳しい内容については別稿があるので繰り返さないが⁽¹⁾、筆者がそこで実感したことは、欧米諸国では19世紀末以来蒐集されてきた膨大なフォークロア資料を図書館や博物館が収蔵し、専門のアーカイブ部署がそのデジタル化と解析、公開を着々と進めている、ということである。その形態は様々だが、基本的な作業の手順は世界共通で、以下のようなものである。

- ①アナログデータをデジタル化する。すなわちオープンリールやカセットテープへの録音はデジタル変換して音声ファイルに、手書きのノート等は撮影して画像ファイルにする。
- ②音声データを聞き起こして文字テキストを作る。画像ファイルになっている手書き文字は解読して打ち込み、これも文字テキストにする。

③整理されたデータを取捨選択して使いやすいようにまとめ、ウェブサイト等で公開する。